

## 中世ファルスと狂言の比較：人間関係の対立における第三者の役割

著者	小澤 祥子
雑誌名	仏語仏文学
巻	36
ページ	57-74
発行年	2010-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00017285">http://hdl.handle.net/10112/00017285</a>

# 中世ファルスと狂言の比較

## — 人間関係の対立における第三者の役割 —

小澤祥子

### はじめに

ファルスは15～16世紀の中世末期に、聖史劇とともに、あるいは単独で、盛んに演じられた世俗劇の1つである。また日本には14世紀に能と共に成立した短い喜劇である狂言がある。ファルスにおいても狂言にあっても、登場人物は、性欲や食欲、物欲などの欲望の充足を目指して行為する者たちである。そして各人各様の欲望は、それが夫婦間でもあるいは主人と召使いの間であっても、当然ながら衝突・対立という劇的状況を生むことになる。本論の目的は、2つのジャンルにおけるこうした人物間の対立のありさまを、そこにおける第三者の関わり方を中心として吟味し、ファルスと狂言の違いを考察することである。

考察の対象としたのは、ファルスはアンドレ・ティシエの『ファルス選集1450-1550』<sup>1)</sup>に収められた65の作品、狂言は笹野堅校訂『大蔵虎寛本能狂言』<sup>2)</sup>に収められた165曲である。

### 1. 図式による作品の分類

概略的になりすぎる危険もあるだろうが、事態を明確にするために、登場人物間の関係を可能な限り簡潔に構造化することを試み、人間関係の対立の構図を記号を使って表してみる。

ここで言う対立とは双方の利害が相反することである。基本的に【⇔】は「対立」、【+】は「協力」、【—】は「中立」、【→】は「一方的な働きかけ」を意味するものとする。対立の当事者をA、B、C、…で表し、直接利害関係をもたない第三者をM、N、…で表す。下記の図示の意味は

それぞれ説明のとおりである。

タイプ1 「 $A \Leftrightarrow B$ 」

A と B は対立関係にある。A、B どちらが行為の中心であるかは問題にしない。また目的も、失敗するか仕返しがあるか等の結果も意味しない。場合によっては一方的な騙し「 $A \rightarrow B$ 」のこともあり得る。A、B それぞれに、ほとんど同じ立場の人たちが複数ある場合もこれで表す。

タイプ2 「 $(A + B) \Leftrightarrow C$ 」

A と B は立場は別だが組んでいて、C に対して利害を共有している。

タイプ3 「 $A (+ M) \Leftrightarrow B$ 」

A と B は対立関係にある。M は A の助言者や協力者であるが利害は共有せず、傍観者的役割のことが多い。

タイプ4 「 $(A \Leftrightarrow B) - M$ 」

A と B の対立に関して M は中立の立場にある。

タイプ5 「 $(A \Leftrightarrow B) \Leftrightarrow M$ 」

対立していた A と B が手を握って、本来対立関係にない第三者を騙したりひどい目に合わせたりする。

タイプ6 「 $A \rightarrow (B \Leftrightarrow M)$ 」または「 $M \rightarrow (A \Leftrightarrow B)$ 」

ある者が一方的に働きかけて2者を対立させる。

以上の構図にそって、登場人物数によってファルスと狂言のそれぞれの作品を分類すると、作品数は表1、表2のようになる。「その他」に分類したものは、ファルスでは性欲をテーマとする作品や、狂言では、めでたいものあるいは能のパロディなどで、対立ととるには難しい作品である。狂言ではかなり広い意味での人間関係も対立と捉えて分類した。

当事者だけのタイプ1とタイプ2を2者対立、当事者以外の第三者がからむタイプ3以降を3者対立とすると、表を比較して、ファルスは2

表1 ファルス

タイプ	登場人物数				合計	%
	2人	3人	4人	5人以上		
1. 「 $A \Leftrightarrow B$ 」	2		5		7	10.8
2. 「 $(A + B) \Leftrightarrow C$ 」		5	1	2	8	12.3
3. 「 $A (+ M) \Leftrightarrow B$ 」		3	7	1	11	16.9
4. 「 $(A \Leftrightarrow B) - M$ 」		2	2	2	6	9.2
5. 「 $(A \Leftrightarrow B) \Leftrightarrow M$ 」		5			5	7.7
6. 「 $A \rightarrow (B \Leftrightarrow M)$ 」		1	4	2	7	10.8
7. 複雑なもの			8	3	11	16.9
その他	2	2	4	2	10	15.4
合計	4	18	31	12	65	100.0

表2 狂言

タイプ	登場人物数			合計	%
	2人	3人	4人以上		
1. 「 $A \Leftrightarrow B$ 」	47	19	7	73	44.2
2. 「 $(A + B) \Leftrightarrow C$ 」		19	2	21	12.7
3. 「 $A (+ M) \Leftrightarrow B$ 」		1	3	4	2.4
4. 「 $(A \Leftrightarrow B) - M$ 」		12	2	14	8.5
5. 「 $(A \Leftrightarrow B) \Leftrightarrow M$ 」		(1)		(1)	(0.6)
6. 「 $M \rightarrow (A \Leftrightarrow B)$ 」		14	10	24	14.5
7. やや複雑なもの		5	1	6	3.6
その他	1	15	7	23	14.0
合計	48	85	32	165	99.9

者対立が全作品の約23%であるのに対して、狂言は約57%が2者対立である。ちなみに両ジャンルにおける1作品の登場人物数の平均は、表3に見るように、ファルスでは約4人、狂言では約3人である<sup>3)</sup>。登場人物の数だけから見ても、狂言はファルスより人間関係が単純であること

が推測できるのだが、さらに狂言では、登場人物が3人以上であっても、47曲（登場人物3人以上の作品の約40%）が2者対立なのである。

タイプ3以降の3者対立の作品数を見てみると、ファルスでは全作品の60%を越えているが、狂言では30%に満たない。狂言でタイプ5の数を（ ）にしてあるのは、

ぴったり該当するものがなく、タイプ4に分類した作品の中で最後の部分だけが当てはまる1曲を重複して挙げてあるからである。狂言は3者対立の作品が少ないだけでなく、構図もタイプ4とタイプ6に偏っている。しかしファルスでは、タイプ3から複雑なものまで、どのタイプにもいくつも作品があって、狂言に較べてずっとバラエティに富んでいる。対立する2者に第三者がからんで様々なタイプの対立関係が生まれていると言えるだろう。それは、7番目の複雑なものに分類した作品が多いことから裏づけられる。

このように、狂言が2者対立が中心であるのに対して、ファルスでは対立する2者以外の第三者の働きが、狂言よりはるかに重要性を持つことが把握できる。それでは、タイプ3以降の作品について具体的に比較し、考察を深めよう。

## 2. 作品の考察

### 2-1. タイプ3 「A(+M)⇔B」

第三者が直接対立の中に参加するのではなく相談者などの立場を取るこのタイプの作品は、ファルスに一番多いタイプである。ファルスはカーニバルの祝祭の笑いと同様に結び付いているが、カーニバルは、飲食と性の節制を教会から強要される四句節を目前にして肉体的欲望を解放

表3 1作品の登場人物数

人数 (人)	ファルス (篇)	狂言 (曲)
2	4	48
3	18	85
4	31	27
5	8	4
6	3	1
8	1	0
平均	3.9人	2.9人

する祭りであった。従ってファルススの主要なテーマは性欲で、それも夫婦間の問題が多い。11篇の内10篇は夫婦の対立に第三者が加わったものである。妻が情人を持つコキユ物が5篇、夫の浮気が1篇、それ以外の夫婦争いが4篇である。夫婦物ではない1篇（『〈家事万端〉』）は小間使いと女主人が対立している。

第三者の役割を見ると、4篇（『靴直しカルバン』『煙突掃除夫』『修道士ギルベール』『鶏のねぐら』<sup>4)</sup>）で、隣家の者Mが妻Aの味方になったりアドバイスしたりする。また『神を称え、たちまち呪うコラン』<sup>5)</sup>では、夫に捨てられた妻がやさしい愛人Mのお陰で立ち直り、豊かになって子どもまでできて、戻ってきた夫をやりこめる。夫がAの場合は2篇（『ロバの橋』『しでかした伊達者』<sup>6)</sup>）で、修道士と医者<sup>キャラクター</sup>がMとなって、それぞれに状況を逆転させるよい知恵を授ける。また『〈家事万端〉』<sup>7)</sup>では、鬱々として仕事など全然やる気のない小間使いAを見かけ、シャルラタン<sup>8)</sup> Mが医者として「病気を治してやる」と遊びに誘う。小間使いは喜んで仕事を放って遊びに行ってしまう。

以上の8篇は、ただ妻の嘆きを慰めるだけの場合（『煙突掃除夫』）もあるが、それ以外では、いずれも協力者Mは、助太刀した方の状況を改善し、夫婦間では優位に立たせることに成功する。また、この第三者がA、Bの対立の場に、一方の助太刀として直接登場するのは、『煙突掃除夫』と『鶏のねぐら』だけである。あとは対立相手とは全く交渉を持たないか、協力者であることを知られないように巧妙に振る舞う。例えば『修道士ギルベール』では、年老いた夫との性生活に不満な若い妻に愛人を持つことを勧めた隣家の女Mは、夫の不意の帰宅によって妻の情事がばれそうになると、それを救う手立てを考えて自ら夫に取りなす。すなわち、情事の相手の修道士ギルベールが寢床に残して行った下ばきを、子宝が授かるように妻が教会から借りてきた、聖者の聖遺物であると、まことしやかに言って信じさせるのである。また『しでかした伊達者』では、妻の巡礼中に小間使いを妊娠させてしまい窮地に立たされた夫を、友人の医者Mが救う。夫に病気の振りをさせ、帰宅した妻に夫の尿を持

って来させて検査する。そして夫の妊娠を告げて、仰天する妻に次のように説明する。

Se avés-vous faict ; / Car quant vous fustes arivée / Du voyage où estiés alée, / Vous l’acolites, / Et à l’heure le resjouites / Sy très avant / Qu’alors proceda un enfant. (*RF.*, t. 6, Tis. 36, vv. 292-298).

それは奥さんのせいなんですよ！ あなたは巡礼の地から帰宅した時、ご主人に抱きつきましたね。その時あんまりご主人を喜ばせたもんで、子どもができたんです。

さらに、病気の治療法は、夫が小間使いと寝て小間使いのお腹に赤ん坊を移すことだと説得する。このように第三者は、単にアドバイスをするだけでなく、時として非常に重要な役割を果たしている。

残る3篇では、この第三者が、味方のつもりだったのに予想どおりに行かない。『夫を鑄直してもらおう妻たち』<sup>9)</sup>では、夫を窯に入れて若返らせる鑄掛屋がこの相談役Mの立場だが、若返った夫が強くなって権威を主張するという結果になり、しかも元に戻すことは不可能だったため妻たちは後悔することになる。また、『はばかり』でも『雇われバダン』<sup>10)</sup>でも、情事の間夫が帰らないかと思張りを頼んだ下男Mが、妻の思惑に反して妻と愛人の邪魔をする。下男はバダンと呼ばれる道化役が演じており番狂わせの面白さが増している。例えば後者のジャノは、夫が仕事に行くと愛人がやって来て、妻と2人が服を脱いで抱き合うのを見て、「だんなさんに言いつける」と騒ぎ出す。妻は怒り、愛人は自分のギャラン帽をやるからと買収する。それからジャノを追い払うためにパテを買いにやる。食い気のジャノはすぐ分け前を要求する。そして、出かけるやいなや、愛人たちがホッとする間もなく、彼は戻る。まず «Combien de pastez voulez-vous ?» (*RF.*, t. 4, Tis. 19, vv. 233) 「いくつ買えばいいのか」、次に «De quel pris esse que voulez / Que je l’achepte ?» (*ibid.*, vv. 244-245) 「いくらぐらいの値段で買ったらいい?」、それから «je vous veul

demander / Comment esse que l'on marchande. » (*ibid.*, vv. 248-249) 「教えてほしいんだけど、どうやって値切るのかね」、«Apporteray-je un pasté de veau, / Ou un de poule ou de chapon ?» (*ibid.*, vv. 258-259) 「何のパテ？ 子牛？鶏？肥育鶏？」、«Qu'esse que voulez que je apporte ?» (*ibid.*, v. 269) 「何を買ってくるんだっけ」、«Mais escoutez, où les vend-on, / Affin que plus ne revienne ?» (*ibid.*, vv. 271-272) 「ねえねえ、どこで売ってる？もう戻って来ないから」、«J'ay oublié ce que m'avez dit. » (*ibid.*, v. 278) 「たった今聞いたことを忘れた」、«Mais le voulez-vous froit ou chault ?» (*ibid.*, v. 284) 「ところで冷たいのがいい？熱いのがいい？」。愛人たちのいらだちは最高潮に達する。そこへ夫が帰って来る。愛人は慌てて逃げるがジャノは約束のギャラン帽を取って被ってしまう。それを見た夫は妻の浮気を知ってひどく殴りつける。

ここでも、状況を左右しているのは第三者なのである。すなわちファルスでは、第三者の助けによって企みや仕返しが成功する一方で、第三者のせいでも失敗したり番狂わせが起こったりする。第三者は舞台上のキーパーソンとも言える働きをしている。

これに対して、狂言は作品数が少ない<sup>11)</sup>が、ファルスと違って、第三者が知恵を授けたり助けたりするのにAが愚かにも失敗して恥をかく場合が多い。『八幡の前』では、髯選びに志願した男が、知人の教え手が近くで密かに指南しているにもかかわらず、舅の前で決め手となる歌を間違え、呆れた教え手に見放されて失敗してしまう。『薩摩守』でも旅の僧が、秀句（洒落）好きの船頭の船に只乗りする方法を、せっかく茶屋Mに教えてもらいながら、最後のところで肝心の秀句を忘れ船頭を怒らせてしまう。すなわち第三者は、ファルスと違って対立を左右する働きをするのではなく、失敗する者の愚かさを際立たせていると言ってもよい。

## 2-2. タイプ4 「(A⇔B) — M」

対立する2者がいて、どちらにも与しない第三者がいるというこのタイプは、3者対立の狂言に比較的多いものである<sup>12)</sup>。夫婦ゲンカ、主従



争いを始め、物の所有をめぐる争い、権威風を吹かした山伏の弱い者いじめなどに際して、仲裁者として、知人や目代（代官）、あるいはそこに居合わせた人々がMとなる。ほとんどが、間に入って両者の言い分を聞いたり相手に告げたりするだけの、さほど重要な役割ではない。『茶壺』だけが、この目代Mが最後に問題の茶壺を持ち逃げするという落ちがあるが、作品の中心は、目代が茶壺の所有者とそれを自分のものだと言張するスッパ（詐欺師）から別々に事情を聞く時、スッパの方が相手の話を盗み聞きして、そっくり真似て説明したり振りをつけたりする面白さにある。こうした物真似や、歌、踊り、駄洒落などの種々の趣向は狂言の特徴で、人物対立の単純さを補うというより、むしろその趣向を際立たせるために単純な構図となっていると言っても過言ではない。中には争いの決着をつけるMが、大黒天像だったり（『禰宜山伏』）牛だったり（『横座』）して、仲裁者そのものが趣向となっている場合もある。

ファルスにもこのタイプに入る裁判物がいくつかあり<sup>13)</sup>、こちらでは裁判官をめぐる人間同士の駆け引きが描かれる。たとえば『放屁』は、夫婦がおならをしたしないで裁判にかけられる話で、検事と弁護士を兼ねた代訴人 *procureur* Mに、夫婦はそれぞれ、お礼を出すから力を貸してくれるように頼む。この作品では代訴人はきっぱり断るが、『2人の靴直し』では、金持の靴直しの金を騙し取ったとして訴えられた貧乏な靴直しが、金持を知人の裁判官Mのところへ連れて行き、まんまと助けてもらう。中立のはずの第三者が実はタイプ3「A(+M)⇔B」の協力者だった、というどんでん返しが効いている。

『鑄掛屋』は裁判物ではなく、Mは仲裁者でもない。夫婦ゲンカの後だまりっこ比べをしているとき行商の鑄掛屋Mが通りかかり、尋ねても押し黙って動かない2人の様子を見て2人にいろいろいたずらし、挙句の果てに妻にキスをする。たまりかねた夫が「*Le dyable te puist emporter, / Truant paillard !*」(RF., t. 3, Tis. 15, vv. 164-165)「悪魔にさらわれっちなえ！助ええ乞食！」と怒鳴って負けるという話で、第三者がここでは思わぬ番狂わせをもたらしている。『愛人』の医者Mも番狂わせを引き起こ

す。妻は、愛人と楽しもうと思った矢先帰宅した夫を追い払うため、自分は病気だから医者へ尿を持って行って見てもらってほしいとビンを買ってくる。夫は途中で喉が渴いてたまらずビンの中のものを含んでしまい、妻の尿はおいしいと感心する。妻は間違えてワインの入ったビンを買っていたのである。夫は空になったビンに自分の尿を入れる。医者はそれを調べるや否や、「C'est une femme qui a fait / Cela cent fois sans son mary.» (RF., t. 4, Tis. 20, vv. 215-216)「夫なしに100回もアレをした妻のものだ」と断言する。信じられない夫は念を押すが、医者は「Son urine ainsi le descoeuvre.» (ibid., v. 218)「この尿がはっきり告げている」、*«Nenny certes ; il est verité»* (ibid., v. 222)「全くの真実」と譲らない。妻も夫も医者も3人とも勘違いや相手の思いもよらない行動をして、結局夫は自分がコキユであることを知るといふ、誰が勝ったか負けたかわけのわからない面白い作品である。

このようにファルスでは、タイプ3と同様に、第三者が逆転や番狂わせで状況を決定している。狂言の第三者の役割が、両者の仲立ちをしたり、趣向を盛り立てたりしているのとは、大きな違いである。

### 2-3. タイプ5 「(A ⇔ B) ⇔ C」

このタイプは『鑄掛屋と靴直しと飲み屋』『免罪人と葉売りと飲み屋のかみさん』<sup>14)</sup>のように、ケンカしていた当事者同士が組んで、ケンカとは直接関係のない第三者を騙したりひどい目に合わせたりするもので、AもBもM(飲み屋)に対して特に恨みがあるわけではなく、飲み逃げするために騙し、飲み屋が「やられた」という形で終るので、騙された愚かさが強調される。この面白い構図はファルスで好まれたとみえ、この他にも『靴直しと執達吏と牛乳売りの女』『タラバンとタラバと〈家事ひっかき回し〉』<sup>15)</sup>がある。前者では靴直しと牛乳売りのケンカに執達吏Mが、後者では夫婦ゲンカに気のいい下男M(家事ひっかきまわし) Tribouille-Ménageが仲裁に入り、いずれもケンカのとぼっちりを受けるような形で、ケンカしていた2人に悪口雑言を浴びせられてやつけられる。

執達吏は袋叩きにされて半殺しの目に合うし、下男は山のような汚らしい片付け物を押し付けられて逃げ出す。この構図は、難しいことを考えず、手っ取り早くただ笑わせることを狙った見世物芝居 *parade* に効果的だったのではないかと思われる。<sup>16)</sup>

#### 2-4. タイプ6 「A → (B ⇔ M)」または「M → (A ⇔ B)」

これは、1人の動きによって他の2者が対立するものである。

まずファルスでは、企みをする人物Aは、騙したり、仕返しをしたりしたい相手Bと直接対立せずに、第三者Mにさせるという巧妙な手口を使う。たとえば『仕立屋とエゾペ』<sup>17)</sup>では、待遇が悪くて食べ物も十分にももらえていない仕立屋の下男エゾペが、エゾペにもあげてほしいとお城の小間使いが持って来たヤマウズラと鶏の肉を主人の仕立屋が独り占めしたことを知り、自分は手を下さず殿様とその小間使い(MとN)を利用して主人をひどい目に合わせる。仕立屋にたくさんの服を注文した2人に「主人は腕のいい仕立屋だが突然発作を起こして人を食べようとする。自分も何度も恐い目に合った」と嘘をつくのである。

Premier, quand il sent ceste ordure, / La teste luy verrez tourner / Deça delà et [d]emener, / Sans dire mot en sa folie ; / Et puis dessus [son] establie, / Tippe tappe, ses mains frapper. / Incontinent le fault happer / Et de grands buffes luy bailler, / Pour le mal rompre et travailler, / Mesmes le lyer d'une corde / Aucunesfoys, qu'il ne nous morde. / Mais, monseigneurs, je ne dy rien / Que en secret. (*RF.*, t. 2, Tis. 9, vv. 244-256).

その忌まわしい発作の前兆は、まず頭をあちこちにめぐらし、ものも言わず気違いじみた様子で動かします。それから作業台を手でパンパンと叩きます。そしたらすぐ襲いかかって何発かなぐり、病気をやつつけて退治しなきゃなりません。時々は紐で縛って嘔み付かないようにしなきゃだめなんですよ。でも殿様、これは内緒の話で

すよ。

そしてエゾペは、2人が仕立屋の家に来て仕立屋が寸法を取るとき、ハサミを隠しておく。仕立屋はハサミがないので首をあちこちにめぐらして捜し、ハサミの音で見つけようと台をパンパン叩く。殿様と小間使いはすわとばかりに仕立屋を打ちのめし、エゾペは自分の手は汚さずに仕立屋に恨みを晴らす。ファルス研究家のB. C. ボウエンはファルスの下男の中でも最も狡猾なのはエゾペであろうと言っている<sup>18)</sup>。

同様に『新パトラン』<sup>19)</sup>では、パトランが、まったく無関係な、しかも見ず知らずの他人を利用して毛皮商人Bから毛皮を騙し取る。すなわち毛皮屋には金持の司祭が支払うと嘘をついて教会へ連れて行き、たまたま告解をしていた助任司祭Mには毛皮屋を、少し錯乱状態の者だが、告解を授けてくれたらご馳走が出るし、と頼む。パトランが去った後には、司祭から代金をもらえると信じている毛皮屋と、告解をしに来たと思っただけで懺悔させようとする助任司祭が置き去りにされ、延々とすれ違いの会話を続けて、遂にはケンカ別れをする。また『殿様とノデ』と『2人の殿様と粉屋』<sup>20)</sup>では、妻を殿様に寝取られたコキュの夫が、殿様の奥方M(後者ではMとN)と関係を持ち殿様を逆にコキュにすることによって復讐する。

ファルスではこのように、「 $A \rightarrow (B \Leftrightarrow M)$ 」の図式となり、対立する2者の一方は巻き込まれた第三者で、Aはそれによって利益を得たり復讐したりするのである。

しかし狂言では、同じ図式であっても大分趣を異にしている。第三者Mが意図的にAまたはAとBを騙して争いの種を蒔く「 $M \rightarrow (A \Leftrightarrow B)$ 」となる。そして、この第三者の影響をさらに広くとらえると、意図はないが第三者が原因・きっかけとなって2者間に対立あるいは緊張関係が生じるものがいくつもある。前者に対して後者をタイプ6bとし、「 $M - (A \Leftrightarrow B)$ 」と表すことにする。なぜこのようにするかというと、狂言ではタイプ6からタイプ6bへとつながっており、そこに人物対立におけ

る第三者の役割の大きな特徴が見られるからである。

まずタイプ6「 $M \rightarrow (A \Leftrightarrow B)$ 」には、教え手Mが愚か聲にでたらめな聲入りの作法を教えて舅の前で恥をかかせようとしたり、都の詐欺師であるスッパMが太郎冠者ににせものを売りつけ、太郎冠者が主人に叱られたりする作品群<sup>21)</sup>がある。これらは、ファルス『新パトラン』と同じように、騙した者が舞台から消えて、後半は騙された者同士のやり取りとなるのだが、『新パトラン』と違い、騙される者はいかにも愚かで信じやすく、舅も主人も聲や太郎冠者が騙されたことをすぐ見抜く。おまけに太郎冠者物には、スッパが別れ際に主人の機嫌を損ねたらこれを謡うようにと囃子物を教えてやるので、それを囃して主人に許され「めでたい」形で終るものが多い。

タイプ6にはさらに3曲（『井碯』『猿座頭』『居杭』）あり、前者2曲では、盲人Aが晴眼者Mに目の見えないのにつけ込まれ、いたずらされたり妻を誘惑されたりする。『居杭』の方では逆に、シテMは姿を消す帽子を被って、自分を探す檀那Aと占い師（算置）Bをからかう。このシテは、いつも世話になっている檀那が「居杭よく来た」と言って頭をたたくのがいやで清水の観音様をお願いに行ったところ、姿を消す頭巾を授けられ、檀那と算置をケンカさせて喜んで逃げて行くのである。これは一応仕返して「 $A \rightarrow (B \Leftrightarrow M)$ 」（Aはシテ、Mは算置）とも考えられるのだが、檀那がなぜ男の頭をたたくのかよくわからない。いずれにせよこれら3曲の場合は、騙される方は愚かではないが“見えない”ということで劣勢に立ち相手の思うままにされている。つまりタイプ6の13曲では、実際に目が見えないか知性の目が曇っているかの違いはあるが、いずれも“ものが見えない”者が見える者・ものを知っている者Mにからかわれ翻弄されるという共通性がある。ファルスのように、ある人物が自分の利益のために、対決すべき相手と無関係な第三者を対立させて得をする、というのとは違い、タイプ3の時と同じく騙される方の愚かさや見えないことの滑稽さをあからさまにするのが、このタイプの狂言における第三者の役割と言えらるだろう。

次にタイプ6bでは、Mは意図的に争いを引き起こすのではなく、「原因」や単なる「きっかけ」としての関わりになる。

まず「原因」を作る場合<sup>22)</sup>だが、例えば『成上り』では、参詣のおこもりをしていた主人と太郎冠者が寝ている間に、スッパMが太郎冠者から主人の太刀を盗み、主従に揉め事の種を蒔く。『口真似』では酒癖の悪い男Mが太郎冠者に連れられて主人の元へ行ったため、主人が男を帰そうとして、機転の利かない太郎冠者に腹を立てる。『口真似』はタイプ6の『察化』と同工で、『察化』ではスッパMが主人の伯父になりすますという意図的な騙しが違っていただけである。また『船渡聲』の聲は、聲入りのために持参した酒を途中で船頭Mに所望され、半分脅されてやむなく飲ませ、とうとう自分も一緒に皆飲んでしまって、空樽を持って舅のところへ行き追われて逃げる。これらは人物Mが原因となって対立が起こる例である。けれどもタイプ6と同じく、争いの種を蒔かれる方は、愚かだったり弱かったり隙だらけなのである。

また「きっかけ」になる作品<sup>23)</sup>では、例えば『素襖落』では、主人の命令で主人の伯父を伊勢参りに誘いに行った太郎冠者が、伯父にふるまわれた酒を飲みすぎ、饞別に素襖までもらってすっかりいい気分で帰り主人に叱られる。伯父Mは善意の人であり、飲みすぎた太郎冠者の失敗である。『骨皮』もまた愚か者の失敗談である。新米の出家である新発意が寺を譲られ、元の住持に檀那衆を大事にするように言われたため、傘を借りに来た男に住持の新しい傘を貸してやる。住持はそのような時は「辻風にあって骨はほね、かわは皮になって」壊れてしまったとうまく断わるように注意する。そこで新発意は、次に馬を貸してくれと頼みに来た別の男にそのとおり言って断る。住持は呆れて馬のための断わり方を教えるが、新発意は今度は食事に招待に来た別の男に、住持は行かれないと馬の断わり方で返事をする。それを聞いてすっかり怒った住持に、新発意がその女性関係を暴露してやり込める。次々に来る3人の檀那衆M、N、Oがきっかけとなって、新発意の愚かさが明るみに出て住持と摩擦を起こすのである。つまり真の原因はその人の中の人間的な弱さや愚

かさであったり欲望であったりする。それが第三者との関わりで、ある出来事となって顕れる。狂言は、そうした日常の人間関係のささやかなドラマの中に笑うべき人間の姿を提供している。

このように、タイプ6からタイプ6bへ、そして後者の中でも第三者が「原因」から「きっかけ」へと、その人間関係は極めて日常的なものになっていくことがわかる。

## 2-5. 複雑なもの

ここに分類したファルス作品<sup>24)</sup>では、これまでに述べた構図が組み合わさって、より複雑になったり前半と後半で対立関係が変化したりしている。ファルスの人間対立における第三者の役割として新たに注目されることを、『無の息子ジュナン』の例から述べよう。

自分の父親が誰なのかを知りたがるジュナンAを、司祭Bが「自分の息子だ」と認めるのだが、母親Cはそれを否定して、ジュナンに父親はいないをつっぱねる。ジュナンがお腹に出来た時一緒に寝ていたのは上着だと言うのである。母親と一体だったジュナンは父を発見したことによって母親と切り離されることになる ( $(A + B) \Leftrightarrow C$ )。占い師が呼ばれるが、3人の言い分を聞いて意見がころころ変わり、最後には、ジュナンは司祭の子でも母親の子でもなく、人間の男女から生まれた息子ではないことになると結論づける。ジュナンは「無の息子」になったのである。すなわち問題を收拾するために呼ばれた占い師Mがさらに混迷させ、ジュナンを両親から切り離してしまう。[[ $(A + B) \Leftrightarrow C$ ] - M] となるはずだったが、「 $M \rightarrow (A, B, C)$ 」とでも図示されるような状況にジュナンを追いやってしまうのだ。この作品では最後は4人もバラバラになる。

第三者によって個々がバラバラになっていく姿は、「対立なし」に分類した『マルゴの告解』と『盲人といざり』<sup>25)</sup>にもよく表れている。告解を授ける司祭と告白するマルゴは決して対立してはいない。しかし告白が進むにつれて、司祭の神の仮面ははがれ、好色な人間の男が現れてく

る。また身障者として仲良く乞食をしていた盲人といざりは、聖者マルタンの奇跡によって不具の身が治り、喜ぶ前者と「働かなければならなくなった」と恨む後者に分かれる。神あるいは聖者が第三者となってタイプ6「 $M \rightarrow (A \Leftrightarrow B)$ 」の構図が生まれるのである。これに『無の息子ジュナン』を考え合わせれば、神や聖者を含め、第三者の存在によって、1人1人が個々になっていく姿が、ファルスという笑劇を通して認められると言えるだろう。

狂言で「やや複雑」とした作品<sup>26)</sup>は、これまでの分類に少し入りきれないだけで、決して複雑な対立構図ではない。太郎冠者Bの意思が強く出て、単純にタイプ2「 $(A + B) \Leftrightarrow C$ 」(Aは大名)とは言えない『靱猿』とか、長い間不在の後帰京した鈍太郎Aと、正妻Bと愛人Cが、「 $A \Leftrightarrow B$ 」「 $B \Leftrightarrow C$ 」「 $A \Leftrightarrow (B + C)$ 」「 $B \Leftrightarrow C$ 」を経て丸く収まる『鈍太郎』など、2者対立が多少アレンジされたものであり、ファルスのように個々がバラバラになる姿は皆無と言ってよい。

## まとめ

以上のように、ファルスは、狂言と比べて単に登場人物が多いばかりではなく、当事者以外の人が協力者となったり相談者となったり、あるいは番狂わせを起こしたりして密接に絡み合い、対立の結果を大きく左右する。さらに、ケンカをしていた者同士が次には組んで無関係な第三者を騙すこともあるし、第三者を利用して仕返しや盗みなどが行われることもあり、劇の展開において第三者が重要な役割を果たす。また神を含めた第三者の存在によって、対立していないと見られた人たちが個々になって切り離されていく姿も認められる。

狂言の第三者の役割は、大きく見て、対立する2者の調停をする場合と対立の原因を作る場合とがあるが、どちらも対立する当事者2者とそれほど密接な関わりを持たない。調停者は双方の言い分を聞くだけの場合が多く、第三者が争いの種を蒔くときも、ただ相手の“見えないこと”をからかって喜んでおり、深い恨みなどはない。さらに第三者が日常的



なささいな出来事のきっかけを作るだけのこともある。本当の原因は事を起こす当事者の愚かさや人間的な弱さである。そうした人間性の愚かさ・弱さを、狂言は笑って認めているのである。

それに対してファルスでは、騙される側は常に人が良いわけでも隙だらけなわけでもない。むしろ騙す者に負けず劣らず罠をしかけている。観客は、第三者を巻き込んで、より旨い手を使った者が勝つを見て喜び、策術を弄した、あるいは愚かに見える者の思いがけない逆転劇に拍手喝采したのだろう。

第三者を利用する中でも最も巧妙なのは、エゾペのように自分の仕返しを他人にさせることである。シェークスピアのオセロは、イヤーゴの言葉の罠にはまって、イヤーゴの思惑通り愛する妻をその手にかけて殺した。この間接の殺人が殺人の中で最も巧妙な「完全犯罪」であると、イギリスの推理作家アガサ・クリスティーは書いている<sup>27)</sup>。ファルスの上演の担い手の中心は裁判所の下級職員であるバゾシアン<sup>28)</sup>の組合だった。考えてみれば、裁判とは当事者以外の第三者による裁定であり、仕返しまたは逆転の機会を提供する社会的機構に他ならない。バゾシアンたちは模擬裁判やファルスの上演を通じて、争いにおける第三者の関わり方を自覚し、人間関係に対する多角的なものの見方の修練を積んでいったのではなかろうか。ファルス作家の見ていたものは虚々実々の人間社会であったに違いない。狂言も笑いの中に人間を捉えるからには、人間性への同じような鋭い目があつたはずである。しかし、2者の掛け合いを基本とし、祝福の芸という役割を担っていた狂言には、ファルスのように、対立する2者に第三者がからんで、時には個々がバラバラになる熾烈な人間関係を描くことはなかった。

以上、人間関係の対立における第三者の役割をめぐって、ファルスと狂言の違いを考察した。取上げた作品に限られており、明確に分類出来ない作品も多々あるが、2つの演劇ジャンルの本質的な違いが明らかになったと考える。

(2008年9月博士課程後期課程修了)

## 注

- 1) André Tissier, (éd.), *Recueil de farces (1450-1550)*, 13 vol, Genève, Droz, 1986-2000. 以下 RF. と略す。Tis. はティシエによる作品番号である。
- 2) 笹野 堅校訂『大蔵虎寛本能狂言』上中下、岩波書店、1967 (1942-1945) 年。
- 3) 狂言には、近所の人々や鬼の手下などその他大勢の役割で不特定数の「立衆」という役があり16作品に登場するが、人数は多くても立場は1つだから、それぞれ1人の登場人物として加算した。
- 4) *Le savetier Calbain*, RF., t. 3, Tis. 15 ; *Le ramoneur de cheminées*, *ibid.*, t. 4, Tis. 21 ; *Frère Guillebert*, *ibid.*, t. 6, Tis. 34 ; *Le poulrier*, *ibid.*, t. 11, Tis. 58.
- 5) *Colin qui loue et dépîte Dieu en un moment*, *ibid.*, t. 1, Tis. 2.
- 6) *Le pont aux ânes*, *ibid.*, t. 6, Tis. 32 ; *Le galant qui a fait le coup*, *ibid.*, t. 6, Tis. 36.
- 7) *Tout-Ménage*, *ibid.*, t. 5, Tis. 30.
- 8) charlatan. 言葉巧みに詐欺・いかさまをする遍歴者たちの総称。いかがわしい医術や薬を売り込むことが多い。
- 9) *Les femmes qui font refondre leurs maris*, RF., t. 6, Tis. 33.
- 10) *Le retrait*, *ibid.*, t. 1, Tis. 3 ; *Le badin qui se loue*, *ibid.*, t. 4, Tis. 19.
- 11) 『止動方角』『引敷掣』『八幡の前』『薩摩守』。
- 12) 『吃り』『鎌腹』『鐘の音』『鬪罪人』『牛馬』『雁磔』『茶壺』『長光』『竹子』『横座』『禰宜山伏』『犬山伏』『鍋八撥』『伯養』。
- 13) *L'official*, RF., t. 2, Tis. 8 ; *Raoullet Ployart*, *ibid.*, t. 2, Tis. 11 ; *Le chaudronnier*, *ibid.*, t. 3, Tis. 15 ; *Un amoureux*, *ibid.*, t. 4, Tis. 20 ; *Le pet*, *ibid.*, t. 10, Tis. 48 ; *Les deux savetiers*, *ibid.*, t. 12, Tis. 61.
- 14) *Le chaudronnier, le savetier et le tavernier*, *ibid.*, t. 2, Tis. 10 ; *Le pardonneur, le triacleur et la tavernière*, *ibid.*, t. 5, Tis. 29.
- 15) *Le savetier, le sergent et la laitière*, *ibid.*, t. 8, Tis. 41 ; *Tarabin, Tarabas et Tribouille-Ménage*, *ibid.*, t. 10, Tis. 49.
- 16) タイプ5にはもう1つ *Mimin le goutteux et les deux sourds*, *ibid.*, t. 5, Tis. 26がある。
- 17) *Le couturier et Esopet*, *ibid.*, t. 2, Tis. 9.
- 18) «parmi les quelques-uns qui sont rusés le meilleur est peut-être Esopet du *Couturier et Esopet*.» (Barbara C. Bowen, *Les Caractéristiques essentielles de la Farce française et leur survivance dans les années 1550-1620*, Urbana, University of Illinois Press, 1964, p. 51).
- 19) *Le nouveau Pathelin*, RF., t. 8, Tis. 39.

- 20) *Le gentilhomme et Naudet*, *ibid.*, t. 1, Tis. 4 ; *Les deux gentilshommes et le meunier*, *ibid.*, t. 1, Tis. 5.
- 21) 『末広がり』『目近』『隠笠』『宝の槌』『鎧』『察化』『庖丁髯』『音曲髯』『鶏髯』『舎弟』。
- 22) 『成上り』『口真似』『船渡髯』『老武者』『花折』。
- 23) 『素襖落』『米市』『岡大夫』『伊文字』『骨皮』『御茶の水』。
- 24) *Les deux maris et leurs deux femmes, dont l'une a male tête et l'autre est tendre du cu*, *RF.*, t. 1, Tis. 6 ; *Jenin, fils de rien*, *ibid.*, t. 3, Tis. 18 ; *Le grand voyage et pèlerinage de sainte Caquette*, *ibid.*, t. 2, Tis. 7 ; *Le pâté et la tarte*, *ibid.*, t. 3, Tis. 16 ; *Le meunier de qui le diable emporte l'âme en enfer*, *ibid.*, t. 4, Tis. 22 ; *Colin, fils de Thévot le maire*, *ibid.*, t. 5, Tis. 28 ; *Lucas, sergent boiteux et borgne, et le bon payeur*, *ibid.*, t. 6, Tis. 35 ; *Maître Pathelin*, *ibid.*, t. 7, Tis. 38 ; *Le savetier, le moine et la femme*, *ibid.*, t. 9, Tis. 44 ; *Mahuet, natif de Bagnolet, qui va à Paris au marché pour vendre ses œufs et sa crème*, *ibid.*, t. 10, Tis. 50 ; *La cornette*, *ibid.*, t. 10, Tis. 54.
- 25) *La confession Margot*, *ibid.*, t. 6, Tis. 37 ; *L'aveugle et le boiteux*, *ibid.*, t. 11, Tis. 60.
- 26) 『鞆猿』『武悪』『縄綱』『鈍太郎』『河原太郎』『呂蓮』。
- 27) アガサ・クリスティー『カーテン』、中村能三訳、早川書房、1976年、p.237。

### 参考文献

- Tissier, André (éd.), *Farces françaises de la Fin du Moyen Age*, transcription en français moderne, 4 vol, Genève, Droz, 1999.
- Bowen, Barbara C., *Les Caractéristiques essentielles de la Farce française et leur survivance dans les années 1550-1620*, Urbana, University of Illinois Press, 1964.
- Julleville, L. Petit de, *Répertoire du théâtre comique en France au Moyen Age*, Genève, Slatkine Reprints, 1913 (1886).
- Lewicka, Halina, *Etudes sur l'ancienne farce française*, Paris, Klincksieck, 1974.
- Rey-Flaud, Bernadette, *La Farce ou la machine à rire : Théorie d'un genre dramatique 1450-1550*, Genève, Droz, 1984.
- 小林 貢監修・油谷光雄編『狂言ハンドブック(改訂版)』、三省堂、2003年。
- 田口和夫『狂言論考(説話からの形成とその展開)』、三弥井書店、1977年。
- 戸井田道三『「狂言」落魄した神々の変貌』、平凡社、1997年。
- 橋本朝生『中世史劇としての狂言』、若草書房、1997年。